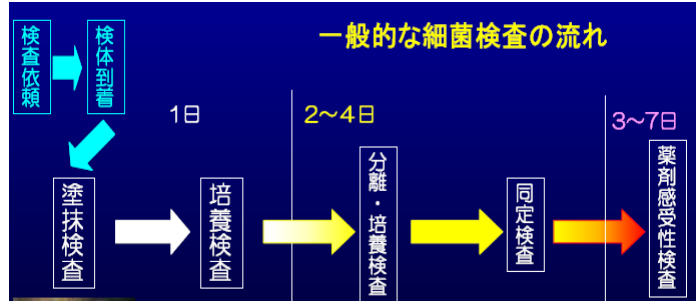


巷ではスーパー耐性菌が話題です。

●細菌検査をもう一度確認しましょう。



## ●グラム染色はオススメ！

◎微生物迅速推定検査として有用

- ・簡便な手技で短時間に結果報告ができる
- ・採取部位、動物の臨床像を知ることで菌の推定をさらに絞り込むことが可能

◎菌が認められただけでは感染とは言えない。

- ・菌量、多核白血球の存在や貪食像を観察する。

◎治療効果を観察することができる。

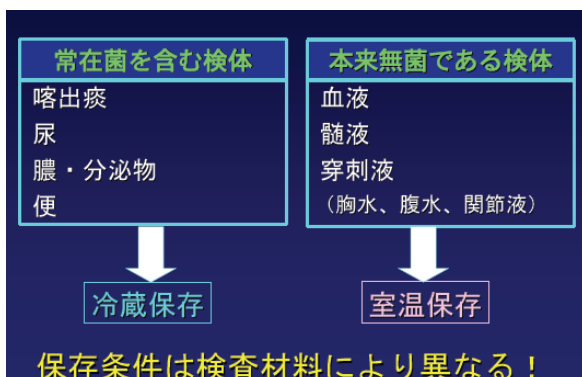
- ・菌の形態変化(菌数の減少、フィラメント化)、菌交代現象、白血球の変化など抗菌薬の有効性を評価できる。

◎低コスト

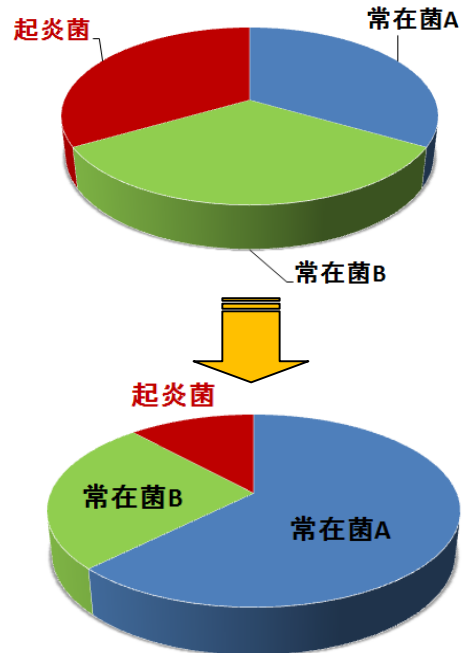
## 検体の適切な採取法と保存法

◎検体採取の原則

- ・病原体のいる場所から採取する(炎症部位)
- ・可能な限り、無菌的に採取する。
- ・動物の病態に適した材料や時期を考慮する。
- ・抗菌薬投与前に採取する。
- ・検体が漏れない安全な滅菌容器に採取する。
- ・たとえば、嫌気性菌における特殊容器など、予想する微生物に適切な容器を選ぶ。

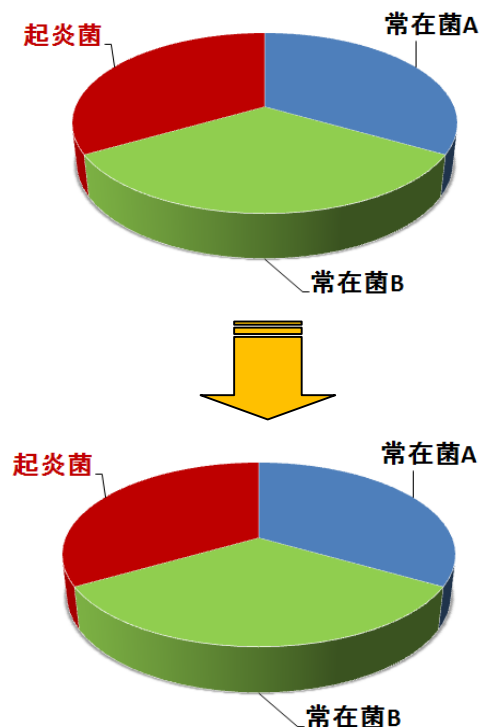


★★★★検体を室温に放置すると★★★★



採取時の菌量と菌の比率が大きく変動！

★★★★冷所保存すれば★★★★



採取時の菌量と菌のバランスが保持できる

## ◎検体の採取方法

- ・感染部位を消毒していれば、その消毒剤を付けないように採取する。
- ・常在菌の混入は検査を煩雑化し、起炎菌の推定を困難とする。
- ・創部を覆っていたガーゼでの提出は、消毒剤の付着や雑菌混入の可能性があるので避けた方がよい。
- ・嫌気性菌の存在を疑う場合は専用容器(嫌気ポータ)に採取する。



底がピンク色になると、酸素が混入しています。嫌気性菌の検出が不可となります。

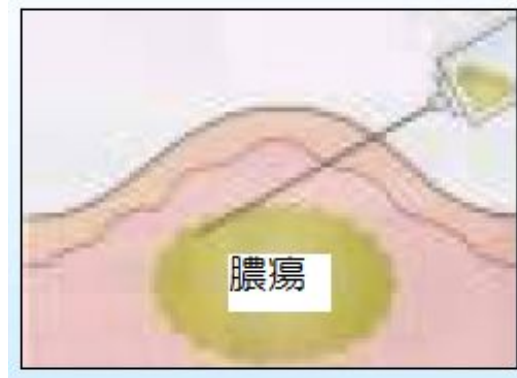
\*嫌気ポーターでも室温や 1ml 以下の微量の場合は数時間で×

\*嫌気保存・冷蔵・1ml 以上のできるだけ多い採取○

- ・創部や潰瘍など開放性の病巣は、表面部から採取せず、深部を綿棒で拭って、注意深く分泌物を採取する。



- ・膿瘍の場合は、穿刺部位を消毒し、注射器などで穿刺して膿瘍壁に近い部位から採取する。



- ・糞便は基本的にはスワブは不可
  - 量が少ない
  - 乾燥により病原微生物が死滅する可能性
- ・病原体を殺さない
  - 採取時に消毒薬の混入を防ぐ
  - 抗菌作用のある物質の混入を避ける (例：キシロカインなど)
  - 抗菌薬投与前に採取する (投与後にする場合は一番濃度の低い時、次の薬剤投与前直前に採取する。)
- ・乾燥させない
- ・長期保存しない

### ◎検査実施前の注意点！

- ★良質な検体であるか否か！
- ★検体の「肉眼的観察 (外観)」も重要！
- ★検体の取り直しのコメントも重要！

## 獣医は細菌検査をどう利用すべきか

- #1. まず、動物の背景から起炎菌を予想する。
- #2. 検体が良質であれば、グラム染色は有力な情報源である。
- #3. 分離菌＝起炎菌とは限らない。培養結果の解釈は総合的に行う。
- #4. グラム染色と培養結果を総合すれば、起炎菌と定着菌を区別することができる。